

別府の温泉医療に関する薬史研究、特に古代～17世紀に関して

○牧 純¹, 関谷 洋志¹, 田邊 知孝², 相良 英憲³, 玉井 栄治¹, 舟橋 達也²
(¹松山大薬感染症学, ²松山大薬衛生化学, ³松山大薬医薬情報解析学)

【緒論】世界的に著名な別府（大分県）の温泉は、保養のみならず治療の目的でも利用されてきたとされる。実際、療養目的で別府を訪問・滞在する客は多い。しかし、その史的考察と科学的裏づけは十分とはいえない。これらの視点より考究を始めたので、本学会にて発表する。【材料・方法】筆頭発表者は、松山市（愛媛県）より度々別府を訪れ、温泉関係の情報収集と撮影を行っている。最近では2013年8月25-27日に出かけ、発表の準備を進めた。これまでに調査した温泉医療史について、医療薬学の視点よりの考究を試みた。今回は、とりわけ古代より17世紀までに重点をおく。【結果・考察】検討した文献資料によると、別府の温泉利用は奈良・平安時代まで遡る。『豊後国風土記』にも記載がある。鎌倉時代には、時宗の開祖一遍上人（いっぺんしょうにん、現在の愛媛県松山市の宝厳寺出身）が、瀬戸内海西部地方で元々行われてきた蒸し風呂健康法を、温泉地別府に伝えた。別府の温泉は、戦国時代も利用されていた。現在の大分県を中心に覇を唱えていた切支丹大名大友義鎮（よししげ又は宗麟そうりん）らの利用は、その代表例である。江戸時代以降については現在検討中であるが、医学者頼山陽の来訪、明礬（ミョウバン）の生産利用、地獄蒸しによる野菜の消毒、九州大学温泉治療研究所（旧称）の実績が注目されよう。今回発表のように、別府の温泉は、昔より健康増進や感染症予防に役立ってきた。今日いわれる医療的価値が、既に江戸時代以前より、見出されていたことは注目に値する。この優れた自然・文化遺産は、医療薬学の視点から、その真価が今後さらに広く認識されることが望まれる。